

詩篇 149 篇 4 節 「御民を悦ぶ神」

1A 愛し、喜ぶ主

1B 造り主

2B 王

2A ご自分の民

3A 神を喜ばせる生活

1B 自分を喜ばすことの徒労

2B 神を喜ばすことの満ち足り

4A 救いで着飾る方

1B 神の恵みによる作品

2B 御霊による栄光

本文

私たちの聖書通読の学びは、ついに詩篇の最後まで来ました。午後に、詩編 145 篇から 150 篇までを読みたいと思います。今朝は、149 篇 4 節に注目したいと思います。「**主は、ご自分の民を愛し、救いをもって貧しい者を飾られる。**」

1A 愛し、喜ぶ主

私たちの主が、ご自分の民を愛しておられる、という言葉です。ここの「愛しておられる」という言葉は、「喜んでおられる」とか「顧みておられる」と訳すことのできる言葉です。ですから、ただ「愛している」ということだけでなく、「愛着を持っている」というような思いです。主が、ご自分のものとしておられる者たちを喜んで、愛して、楽しんでる姿をここでは表しています。

ちょうどこれは、親馬鹿をしている時の感情に似ています。フェイスブックで親は自分の息子や娘の写真ばかりを掲載します。運動会になれば、自分の息子の徒競走を録画するのに、お父さんが必死に動きます。そのように、自分の愛する者を喜んでる姿を示しています。聖書では、イエス様が地上で忠実にご自身に仕える僕について、この感情を言い表されました。「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。(マタイ 25:21)」神の民であれば、主はこのような感情を皆さんに抱いておられることを知ってください。

1B 造り主

主は、ご自分の民であるからこそ、その存在としていることを喜んでおられます。146 篇 9 節には、「**主は悪者の道を曲げられる**」とありますが、悪者に対して主は喜びを抱いておりません。では、ご自分の民あるいは聖徒と、そうではない者たちとの違いは何かについて見てみましょう。少

し前、2 節を読みますと、主がご自分の民を悦ばれる前に、その民が主を喜び、楽しんでいる姿を読むことができます。「イスラエルは、おのれの造り主にあつて喜べ。シオンの子らは、おのれの王にあつて楽しめ。」

第一に、神の民は、神が造り主であり、自分を造られた方であることを知っています。誰もが自分を造ったものには、愛着が付きまとうものです。神は天も地も全てのものを創造されましたが、その中で、人はご自分の形に造られました。そして人を造られた六日目に、「見よ。それは非常によかった。(創世 1:31)」と言われていました。そして単に造られただけでなく、一つのご自身の民族としてこしらえました。エジプトにいるヤコブの家族、その増え広がるイスラエルの子孫を神はエジプトから出し、そして彼らを一つにしてシナイの山にまで導き、そこで、「あなたがたはすべての国々の民の中にあつて、わたしの宝となる。(出エジプト 19:5)」と言われました。イザヤ書には、彼らを一つの民にしたことを、ぶどう園に例えて神が語っておられます。「5:1-2 さあ、わが愛する者のためにわたしは歌おう。そのぶどう畑についてのわが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畑を持っていた。彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった。」主は、イスラエルの民を、手塩をかけて造られたのです。

ですから、主が自分を造ってくださった恵みを受け入れ、そのことを喜んで人が、神の民ということになります。すべて造り主に人々は依存しており、その命も力も、この方の手の中にあることを知ることが、福音の始まりです。終わりの日に、地上に大患難がある時にそれでも神は人々を救いたいと願われて天使を遣わされますが、天使は「永遠の福音を携えていた。」とあります。そしてこう叫びます。「黙示 14:7 神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

けれども、ご自分が造られたのに、それを知らないこと、認めないことほど、神の心を悲しませるものはありません。キリストについて、ヨハネは言いました。「1:10 この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。」これは不信者であります。神に選ばれ、神に造られた、神を知っているはずの民が反抗して、裏切ることほど悲しませることはありません。イザヤが預言しました。「1:2-3 子らはわたしが大きくなり、育てた。しかし彼らはわたしに逆らった。牛はその飼い主を、ろばは持ち主の飼料おけを知っている。それなのに、イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない。」

造られた者であるにも関わらず、あたかも自分が何かをしていると思っている時に、造り主を拒んでいます。主は、イスラエルを裁くためにアッシリヤを用いられましたが、アッシリヤは国々をことごとく倒していく時に、自分の力で自分の知恵でそのことを行なっているのだと思っていました。そのことを主は、「斧は、それを使って切る人に向かって高ぶることができようか。のこぎりは、それをひく人に向かっておごることができようか。(イザヤ 10:15)」と言われました。いかがでしょうか、

すべてのことは、神の憐れみによって成り立っています。人が願っても努力しても、事が進むのもつばら神の憐れみによるのです。それをあたかも、自分がやったから事が進んでいるのだと思っただ時に、その人は造り主を認めていないということになります。しかし、神の民はこの方がご自分を造られたことを知っているのです。

2B 王

そして、神の喜ばれる民は、この方を王として喜び迎えています。「シオンの子らは、おのれの王にあつて楽しめ。」王というのは、どんな存在でしょうか。「主権者」ですね。すべてのことを行なう権利を持っている存在です。ですから、私がもし、「私には、これこれを行なう権利があります。」と言え、それは王に逆らっていることになります。当然の権利だと思っていたら、その時に神の王権を拒んでいることになります。「私には、このことに対して怒る権利がある。」としても、クリスチャンは、「愛は怒らない。」という御言葉が与えられています。憎しみや怒りという当然の権利があっても、私たちはキリストの愛の御国の中に入れられているので、自分を捨てて、愛するという道を選び取ります。

しかし、そのことは楽しいこと、喜びなのです。シオンの子らは、王にあつて楽しんでます。すべての権利が王にあつて自分にはないのに、なぜ楽しみがあるのでしょうか？それは、私たちがこの世の哲学の影響の中にあるからです。個人の幸福を追求することこそが、生きている目的だと刷り込まれています。何か自分以外のもののために、それを愛するがゆえに、自分を捨てて生きるということが悲しいこと、自分を束縛することのように教えられてきたからです。けれども、自分を第一として、自分を正しいとして生きることこそ、不安と恐れ、そして心の渇きを呼び起こすものであります。愛するがゆえに捨てること、ここにまことの幸福があり、それを行なわれたのが私たちの神であり、その独り子キリストを私たちに与えになったのでした。

そして神を王とするというのは、その国が存在していることを認めることになります。自分の生きている領域だけでなく、世界に神の国が広がっていること、どこにいても神がおられることを認める生活をするに他なりません。外国に行ったことのある人は、自分が個人ではなく、日本国民として代表していることに気づくはずで、自分のしていることが、国全体の印象に関わっていることに気づきます。ピリピ書 1 章 27 節に、「御国の民の生活をしてください。(別訳)」という言葉があります。神の国を代表するように、その生活を律してくださいということです。私たちは、教会のみならず、どこにいても、どの生活の側面でも、自分が御国の市民としての生活をしていることを意識しましょう。

2A ご自分の民

そして、神はそのことを喜んで民を愛し、悦んでおられます。ここで大事なことは、神は、イスラエルの民を単に創造されただけではありません。イスラエルは、神から離れたので、一度、裁かれた民であります。4 節に、「救いをもって貧しい者を飾られる。」とありますが、一度、罪によって

裁かれたけれども、そこから救ってくださる方です。罪によって台無しになってしまった人生を、主は新しく再創造することを喜びとし、ゆえになおさらのこと、ご自分の民が愛おしいのです。「シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。(イザヤ 61:3)」

自分は、この人生は失敗してしまった。神によって与えられた尊い時間を自分の身勝手さによって、まるで意味のないものにしてしまった、と思われるのであればご安心ください。神は、こういったことに、異様な情熱を注がれる方です。神は敢えて、どうしようもなくなった人を取り上げて、その人を救いの飾り物で着飾ってくださるのです。その出来栄を見て、神はその恵みを自画自賛される方なのです。「それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。(エペソ 1:6)」きちんとしている人が用いられるなら、その人がきちんとしているからそれができたのだろう、と栄光がその人に向かいます。どうしようもない人が神に用いられるなら、神ご自身がそれをしてくださったのだということで、神に栄光が帰されるのです。したがって神は、まるでおんぼろ車を新車同様の修理をすることを、この上のない喜びにするかのように、罪と失敗でどうしようもなくなったものを修復することは、ご自分の栄光が輝くことです。

3A 神を喜ばせる生活

そこで私たちは考えなければいけません。神を喜ばず生活を歩むか、それとも自分の利益を求めて、自分を喜ばず生活を歩むかの二つの道です。

1B 自分を喜ばずことの徒労

先ほど申し上げましたように、この世の哲学においては、自分の存在理由は自分自身の幸福の追求にあるとしています。つまり、自分を喜ばずことです。これはあまりにも当たり前になっていて、この社会と文化に深く浸透しています。だから、自分自身でも知らぬうちにその道を選び取っていることでしょう。しかし、それは斧が木こりを無視して勝手に動き始めるようなもので、被造物が造り主を無視しているのですから、不安と葛藤と、虚しさに至り付きます。

自分を喜ばそうとするものなら、いつまでも満たされません。喜ばせようとすればするほど、さらに欲しくなります。他人の持っている物、それが目に見える財産であれ、目に見えない栄誉のようなものであれ、それが欲しくなってしまう。それで、その人の周りには戦いや摩擦が起こっています。人々と調和しないのです。その人たちに分かち合うのではなく、もらおうとする、取ろうとしてしまうからです。「ヤコブ 4:1-2 何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。..」

伝道者の書は、自分を喜ばせようとして生きてしまったソロモンの結末が書かれています。彼は、

最後は「神を恐れること、これがすべて」という結論を出しますが、それまでは自分のできることを追及していきました。知恵があったので、知恵を求めたら悩みと悲しみが増しました。それで快樂を求めたら、虚しさが一気に襲います。事業で労苦しましたが、それが後継者には水の泡になってしまうのを知って、虚しくなります。生きている価値などないではないか、という厭世観にとらわれてしまいました。

2B 神を喜ばすことの満ち足り

しかし、神を喜ばそうとするならば、そこには満ち足りが来ます。神を喜ばすことは、先ほども言いましたように、この方を王として自分の権利を放棄することです。けれども、むしろ自分自身に満足を与えるのです。それは、自分を造られた方こそが、自分の生きている目的をご存知だからです。斧を最も良く知っているのは、斧を造った人であり、使っている人です。神に形造られた目的と使命の中で満ち足りることができます。

イエス様が、私たちの模範です。人となられたイエス様はこう言われました。「ヨハネ 8:29 わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行なうからです。」ここの「みこころにかなう」という言葉は、「喜ばす」と訳すことのできるものです。ゆえに、父なる神はいつもご自分の子を喜んでおられました。バプテスマをイエス様が受けられた時に、「これは、わたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。(マタイ 3:17)」と言われたのです。ですから、私たちもこの御父と御子にある交わりに加わることができます。

ありのままの私たちは肉にある者です。私たちがどんなに高尚なことを考えても、そこには自分というものがああり、自分自身を求めています。しかし、御霊によって歩む時に、そこには命と平安があります。「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。(ローマ 8:6)」

私たちはどうやれば、神を喜ばせることができるのでしょうか？ヘブル書 11 章 6 節に、端的な答えがあります。「ヘブル 11:6 信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」主の言われたことを、子供のように素直に受け入れ、信じることです。この信仰によって、私たちは神を喜ばせることができます。

私たちは不思議なことに、どうしても自分を立てようとします。自分がいかに正しく生きるのかと、自分の義を立てようとするのです。しかし、それは自己完結の世界であり、神の喜ばれる正しさではないのです。どうでしょうか、子供がどんなに悪さをして、親はその子がかわいいです。しかし、その子が「私は、親に迷惑をかけています。もう親として考えずに、自分自身で判断して、頑張っ生きています。」これこそが、最も親にとって悲しむことです。子が自分をもはや親としないこと、それが自分の義を立てることであり、神の義の中に生きていないのです。

4A 救いで着飾る方

神を喜ばせていきるのは、自分が神の子どもであるという立場に徹することです。つまり、神に生まれた者として、その創造を喜ぶこと。そして神を父として、その言われることを聞いて、従順になること。

1B 神の恵みによる作品

そして、それはいわゆる「良い子」を務めることではありません。神は創造されただけではなく、再創造、あるいは新しい創造の業に携わっておられる方です。ですから、貧しい者を救いで飾ってくださるのです。それはまるで、捨てられた女が拾われて、美しく輝く服を着せてもらったかのようです。エゼキエル書に、その姿が出てきます。初めは、生まれた日に野原に捨てられた女の子の赤ん坊でした。母に捨てられた赤ん坊で、洗われてもおらず、その血の中でもがいていました。すると、そこに通りがかったのが主ご自身でした。彼女を拾って「生きよ」と繰り返し言われました。

そして、主は彼女を育て上げました。成長して、乳房もふくらみ、髪の毛も伸びました。そして主は、その若い女性と契りを結びました。彼女は水で洗われ、油を塗られ、そして着物で着飾りました。「エゼキエル 16:10-13 わたしはまた、あや織りの着物をあなたに着せ、じゅごんの皮のはきものをはかせ、亜麻布をかぶらせ、絹の着物を着せた。それから、わたしは飾り物であなたを飾り、腕には腕輪をはめ、首には首飾りをかけ、鼻には鼻輪、両耳には耳輪をつけ、頭には輝かしい冠をかぶせた。こうして、あなたは金や銀で飾られ、あなたは亜麻布や絹やあや織り物を着て、上等の小麦粉や蜜や油を食べた。こうして、あなたは非常に美しくなり、栄えて、女王の位についた。」

どうでしょうか、この美しさが、すばり「恵み」です。血だらけになっていた赤ん坊が、ここまで美しく着飾るように神はしてくださったのです。ここにある貧しい者を、救いで着飾るとはこのことをしてくださったのです。それを、エペソ書 2 章では「神の作品」とあります。自分の人生が神の作品として、その恵みに輝いているのです。

2B 御霊による栄光

御霊がその栄光を輝かしてください。「2コリント 3:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」神を喜ばすとき、御霊が働かれます。そして私たちの内で栄光から栄光へと、主の似姿へ変えてくださるのです。ですから私たちは、御霊に導かれるのであり、自分を喜ばして肉に従うのではないということです。